



■書評■

『社会運動ユニオニズム アメリカの新しい労働運動』

国際労働運動研究センター編著

緑風出版刊 定価3,200円+税

労働組合の衰退と個別労働紛争の増加は、先進国共通の特徴であるといわれている。私事であるが、労働相談の現場にいて、労働者の「意識の変容」は、最近とみに気がかりなことである。労働組合をつくるというまどろっこしい回路よりも、とにかく自分の問題を解決してくれさえすればいいのだと言わんばかりに、個人加盟のユニオンに駆け込んでくる例が多いのである。

日本と同じように、あるいはそれ以上に労働組合の組織率低下が進んでいるアメリカはどうか？長らくその実態が伝わって来なかったが、1995年10月のアメリカ総同盟・産業別労働組合会議（AFL-CIO）の大会でのジョン・スウィーニー会長の登場は、アメリカの新しい運動潮流を感じさせるものだった。

本書は、『新世紀の労働運動—ア

メリカの実験』（グレゴリー・マンツイオス編、緑風出版、2001年）に続く、アメリカの新しい労働運動を様々な視点で解明しようとした力作である。本書の構成は、第1部「ニューボイスの歴史的的位置」、第2部「グローバル化の下での労働運動の戦略」、第3部「改革派の運動」、第4部「労働者教育の広がり」、第5部「日米のつながり」、第6部「アメリカ労働運動から学ぶ」とあり、社会運動としての日本の労働運動を考える上で様々な示唆に富んでいる。

その特徴の第1は、大学の労働研究教育センターと労働組合の連携である。私自身知らなかったが、1960年代に労働組合の要求に基づいて、アメリカの大学に約50の労働研究教育センターが設置され、これらのセンターは大学の教育と研究の向上だけでなく、労

働運動の強化にも貢献したといわれ、労使関係分野の新しい世代の専門家を養成することも目的としている（第4部、ケント・ウォン氏の記述に詳しい）。

第2は、コミュニティ組織、移民、マイノリティ、女性組織、宗教グループなどの労働組合の連携である。95年に選ばれた新しいリーダーたちは、これまでの運動の限界を指摘し、社会運動ユニオニズムを主張した。格差拡大に対する「社会的正義」を実現する運動としての生活賃金運動など、地域での「草の根」といわれる人々の運動と労働運動とのコラボレーションは、アメリカの底力を見る思いがする。

第3は、「社会的正義」の具体化として、もっとも差別され、劣悪な労働を強いられてきた移民労働者の労働運動の組織化である。それは組織化される存在としてだけでなく、組織する側のオルグとしても移民労働者が登場したこと。清掃労働者の運動や、12年かかって74,000人の在宅介護労働者を組織化したことは特筆に価する。

なお本書を理解するのに、『希望—行動する人々』（スタッズ・ターケル著、文春文庫）を併読することを勧めたい。アメリカの社会運動を生き生きと伝えてくれる。

（自治労東京都本部組織局・塩原節子）